

《書評》

イバン・イリイチ 『生きる意味』

(高島和哉訳 藤原書店 2005)

小松 佳代子

David Cayley: *Ivan Illich in Conversation*

KAYOKO KOMATSU

本書は、David Cayley, *Ivan Illich in Conversation*, House of Anansi Press, 1992の全訳である。ジャーナリストであるデイヴィッド・ケイリーは、CBC (カナダ国営放送) で、「イリイチの思想を丹念にたどる」[まえがき 13頁] 番組を制作するために、イリイチにインタビューをし、そのインタビューを文字におこして出版されたのが本書である。内容は、以下の通りである。

まえがき (D. ケイリー)

序論 (D. ケイリー)

- 1 教育という神話
- 2 「開発」批判と教会批判
- 3 「道具」の哲学を求めて
- 4 医療と身体の歴史
- 5 稀少性と労働
- 6 ジェンダーとセックス
- 7 キリスト教の墮落
- 8 文字の文化からコンピューターの文化へ
- 9 「物質」の歴史性
- 10 偽神と化した「生命」

1章から9章までは1989年、最後の10章のみ1993年のインタビューである。序論はイリイチの思想全体に対するケイリーによる詳細な解説である。2002年に亡くなったイリイチの思想の全貌を見渡すことのできる貴重なテキストである本書が翻訳されたことは、喜ぶべきことである。

[1] すぐれた読書案内

『脱学校の社会』¹⁾以来、これまでイリイチの著作の邦訳はいくつかあるが、本書によって、それぞれの著作がどのように結びつき、その根底にあるイリイチのスタンスがどのようなものであるかが非常によくわかる。その意味で、本書は何よりもすぐれた読書案内となっている。

「学校とは不可避免的に脱落者を生み出すシステムであり、しかも、成功者よりも多くの脱落者を生み出すシステムである」[94頁] ことを論じた『脱学校の社会』は、1970年代から80年代の日本社会でも、学校批判のよりどころとされた²⁾。しかし、イリイチが目指したのは、学校の廃止ではなく、「学校の非公立化 (disestablishment)」であったことが本書で示される [96頁]。「学校の非公立化」は、「学校教育とは、進歩と開発に専心する社会の儀礼である」[100頁] という認識に依っており、その意味では、コンヴィヴィアルなものを破壊する近代社会に連なる「強制的な学校教育」[103頁] への批判である (これは、『コンヴィヴィアリティのための道具』³⁾ や『ジェンダー』⁴⁾ へとつながる考え方で

- 1) *Deschooling Society*, Calder and Boyars, 1971, 東洋・小澤周三訳 東京創元社 1977
- 2) 例えば、山本哲士『学校の幻想 幻想の学校』新曜社 1985
- 3) *Tools for conviviality*, Heyday Books, 1973, 渡辺京二・渡辺梨佐訳 日本エディタースクール出版部 1989
- 4) *Gender*, Heyday Books, 1982, 玉野井芳郎訳 岩波書店 1984

あろう)。イリイチは、こうした学校教育批判が誤りであったことを自ら指摘する [104頁～]。「問題はそもそも学校教育ではなく、教育 [一般] にかかっている」 [107頁] というのである。つまり、強制的な学校教育を解体し得たとしても、人が何かを学ぶには、誰かの助力のもとで「パッケージ化された知識」 [107頁] を受け取らねばならないという教育概念そのものは、成人教育などの場を通して、むしろ広く人々に内面化されてしまったことにイリイチは気づくのである。そこから、「教育は稀少性のもとでの学習」 [107頁] という認識に至り、その後の「稀少性の概念の歴史」へと展開する一方、「教育という考えを組み立てている諸概念が、その中ではっきりとしたかたちをとって現れるような精神の枠組み、ないしは精神空間」への関心へと開かれていく [107頁]。前者は、『シャドウ・ワーク』⁵⁾ へ、後者が『テキストのぶどう畑で』⁶⁾ などにつながっていくことが本書を読んでいくとわかる。

〔2〕 通奏低音としての近代批判

インタビューに答えてイリイチが述べる、さまざま著作の執筆意図から、彼の思想の根底に流れる近代批判の様相が浮かび上がってくる。

(1) 均質な世界への批判

何よりもはっきり見えるのは、コンヴィヴィアルな世界では、それぞれの文化世界の慣習のもとで一定の制限を設けられてきた諸々の要素が、普遍的・抽象的で、均質な世界へと取って代わられたことへの批判である。その移行を促したものとして、教育や母語や科学が批判の俎上に乗せられる。

それが最も端的に示されるのは、ジェンダーをめぐる議論である。イリイチは述べる。「伝統的な社会や前資本主義的な社会において、抽象的な仕事というものについて語ることは不可能なのです。すなわち、男性であるか女性であるかを気にせずに、たんにそれに従事する働き手を雇えばすむような抽象的な仕事というものについて語ることは不可能なのです」 [262頁]。前資本主義的な社会においては、厳格なジェンダーの境界線が引かれていた。そのような社会においては、男と女は互いに根源的な他者であり、「非対照的な相補性」 [296頁] の下にあった。そのようなジェンダーが失われ、男でも女でもない「人間」という抽象的概念が構成されることで、ジェンダーによって保護されていた女性は、「偶然的な差異」 [278頁] によって劣位にある「人間」として「差別の屈辱」 [274頁] を受けることになる。それがセクシズム（性差別）である。抽象的な人間概念にもとづいて、女性の「人間」としての権利を主張したフェミニズム運動が「賃金格差を悪化させた」 [265頁] というイリイチの主張は、フェミニストから強烈に批判されることになり [279頁]、反動的な思想家と見なされることにもなった。だが本書を読むと、イリイチの目指していたのは、単なる過去への回帰——女性が「父権制という非常に古いカテゴリーの屈辱」 [274頁] に晒されていた過去への回帰——ではなく、むしろ現代社会における男女両性を「経済的中性人のゲッター」 [285頁] からひとしく解放し、人と人の間に（また男性と女性の間）に詩情や想像力、そして友情を成り立たせることであったことということがわかる。そして、そうした観点からみた場合、「人間」としての平等性を追求するフェミニズムの企ては、むしろ「経済的中性人のゲッター」をより堅牢なものにしてしまうという懸念こそが、彼のフェミニズム批判の眼目であったことがわかるのである。

この経済人 (homo economics) という人間像は、「わたしたちが自分の権利として要求しう

5) *Shadow work*, Boyars, 1981, 玉野井芳郎・栗原彬訳 岩波書店 1982

6) *In the vineyard of the text: a commentary to Hugh's Didascalicon*, Univ. of Chicago Press, 1993, 岡部佳世訳 法政大学出版局 1995

るものを生み出すことになる予測可能なプロセスから満足を得ようとする」期待の論理⁷⁾に貫かれた近代人（プロメテウスのエートス）を示すものであり、イリイチは「それとは別のモデル」[170頁]（「自然の善意に信頼を寄せる」エピメテウスのエートス）を追求しているのである。

(2) 他者・外部の喪失

メキシコで異文化間資料センター（CIDOC）を主宰するイリイチは、ボランティア活動に赴こうとする人たちにそのプログラムを放棄させるよう働きかける [142頁]。その「開発」批判は、ボランティア活動が及ぼす「潜在的な危害」を阻止することが目的だが、ここにも上記の均質な世界への批判をかいま見ることができる。均質な世界によって、近代社会は他者や外部を喪失した。中世の身体観 [205頁] や、「人びとが文化と呼ぶもの」、すなわち「ある特定の土地において、ある特定の期間、伝統によって維持されてきた諸々の配置」[259頁]、さらに随所で人類学的知見に言及するのは、根源的な他者を挿入することによって、均質化された近代的世界の自明性を掘り崩すためだと思われる。それは境界やルーツが消失し、アイデンティティになるものにすり代わっていくことを懸念するイリイチのことばに端的に示されている。「人のルーツが断たれたり、否定されたり、なにか二義的なものとみなされるとき、はじめて、いわゆるアイデンティティの探求、ないしは、自己の自己に対する内的な適合感覚の探求というものが、有意義な幻想と化すのです」[295頁]。境界やルーツを消失させることは、人間を脱身体化させ、人間が生きることをめぐるリアリティの喪失へとつながる。あとに残るのは、アイデンティティという幻想だけなのである。

(3) 動詞の「名詞」化

境界やルーツの消失への懸念は、後半の水や生命をめぐる議論にも現れている。「私が論じているのは、水の外観ではなく、その深い実質を想像する人びとの感覚が失われたときに生じる、ある種の死についてなのです」[371頁]。「生命ということばは疑いなく根なし草のことばであり、明らかに常識によって指し示される対応物を欠いたことばです」[394頁]。人々の文化と結びついた水が、物質としてのH₂Oになり、「以前であれば敬意をもって人格と呼ばれていたもの」[385頁]が「生命」と呼ばれるとき、「人びとの操作」[385頁]が始まることをイリイチは指摘する。

このような事態に対して、イリイチは、「いまをいきいきと生きようLet's be alive」と呼びかける [426頁]。生命 (a life) ではなくて、生きること (be alive) を求めるイリイチの思想の根底にあるのは、住むことが人間を収容する「ガレージ」になり⁸⁾、学ぶことが「単位の取得」にとって代わられる⁹⁾近代に対する批判である。それをイリイチは『生きる思想』において、次のように述べる。「もろもろの活動を満足させることをかつて意味していた動詞に代わって、ただ受動的に消費しさえすればいいようにお膳立てされたパッケージを意味する一連の名詞が用いられるようになっている」¹⁰⁾。動詞は、個々が生きる文脈から切り離せないものだが、名詞化したとたん、それは人びとが生きることから切り離され、むしろ人びとを管理し、支配するものと化す。その先にあるのは、アルファベットというテクノロジーによって「自己」「良心」「内面」というものをもつに至った [348頁] 人間が、さらに、サイバネティクスの空間に住むようになって [185頁]、「一個のシステム」と化す [251頁] ことである。

7) 『脱学校の社会』191頁。この点については、ケイラーによる序論30頁参照。

8) イリイチ『生きる思想』桜井直文監訳 藤原書店 1991, 23頁

9) 同上 56頁

10) 同上

[3] 後期イリイチの新たな視点

以上述べてきたように、本書は、これまでのイリイチの思索をつなぐ糸とも言うべきものだが、他方でまた、これまでは見られなかった新たな視点も示している。『生きる思想』で示された、「教育されるべき人間 (homo educandus)¹¹⁾」や「輸送されるべき人間 (homo transportandus)」ということばが示しているように、イリイチの近代批判は、近代的な「道具」によって、ヴァナキュラーな世界で人びとが持っていたさまざまな能力が奪われ、人々が受動的的存在になることへ向けられていた。それを『生きる思想』では、「現在のわれわれに特有の貧困の経験」として「市民の無力感」を生むとしている。本書でも同じように、「無力」を問題にしている。「ケアをおこなう職業とは、本質的に人びとを無力化するものだ」[323頁]。しかし同時に、ケアを受ける側の無力化だけでなく、むしろケアをする側の「無力」を受忍する姿勢が示されている点が新しいのではないか。「自分が無力であるという意識から逃れたくないし、「自分がかれらのことを気にかけて[ケアして]いる」とか、「自分にできることはすべてやってきたし、いまもやっている」などと言いつつはしたくない」[323頁]。そして自らが徹底的に無力であることを認めることから(「われわれは徹底的に無力です」[423頁]「西洋世界の伝統のもとにわたしは、徹底的にみずからのルーツに即して、無力さの政治を選びとりました。わたしは、自身の無力さを証し続けています」[325-326頁])、他者との友情を拡大することが可能になると述べる。「その場合の他者とは、自己の無力さや、われわれの結合された無力さをともに味わうような他者なのです」[423頁]。まさに「共苦compassion」[205頁]

こそが、われわれの求めるべき姿であって、「世界に対する責任」などという「ある独特なタイプの倫理」[425頁]によって、「世界を、自分たちが欲するかたちにつくりかえる」[404頁] ことではない。

人びとの受動的無力化から、能動的「無力」の受忍へのこの展開は、サイバネティクスの精神によって、人間が、主体も客体も存在しないような自己準拠的なシステム、すなわちオートポイエーシス的[428頁]なものとして構築される現状にあって、単にその受動性を能動性へと転換すれば、人々が生き生きと生きられるというのではなく、むしろ人間のその能動性こそが、責任を果たすという形で世界を死せるものとしてしまうことへの危機感の表れではないだろうか。

訳文は、非常に読みやすく、補注や訳注も丁寧で理解を助けてくれる。イリイチの著作を読んだことのない読者にとってもわかりやすいと思う。本書は、通読するだけでなく、何度も立ち返って味読すべきような著作である。

11) イリイチのhomo educandusを引き受け、さらに発展させて思考したものに、宮澤康人「ホモ・エドゥカンスの教育的無意識と〈自己〉の大きな物語」(藤田英典ほか編教育学年報10『教育学の最前線』世織書房 2004)がある。